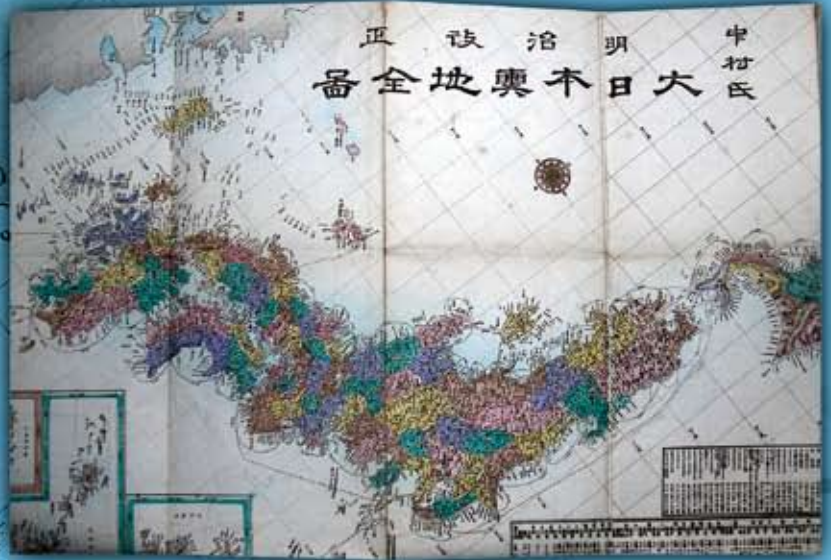




国立大学法人 名古屋大学グローバルCOEプログラム

2009.11
No.7

テキスト布置の解釈学的研究と教育



CONTENTS

- グローバルCOE国際研究集会 …… 02
- 教育プログラム 2009年度講義科目の紹介 …… 04
- 研究活動 グローバルCOE講演会 …… 09
- オープン・レクチャー …… 09
- グローバルCOE研究員ブリーフィング …… 10
- 海外出張報告 …… 11
- 名古屋大学グローバルCOEスタッフ紹介 …… 11
- Report & Information …… 12



GCOE 第7回 国際研究集会

2009年8月29日(土) 名古屋大学文系総合館
7Fカンファレンスホール
9月4日(金)―6日(日) 野依記念学流交流館

Sixth Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL6)

文学研究科グローバル COE プログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」にとって第7回の国際研究集会となる“Sixth Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL6)”は、WAFL6組織委員会との共催により、8月29日と9月4日から6日の2回に分け、都合4日間にわたって開かれた。8月29日の集会は名古屋大学文系総合館7階で行われ、その前半に設けられた特別パネル「日本語文法の諸相と日本文法論」には、グローバル COE から釘貫亨教授・金銀珠研究員が参加して、異なる

時代の日本語に於ける現象の分析と並んで日本語学の近代化に焦点を当てた研究史の総括が展開された。同日後半と、同じく名古屋大学内の野依記念学術交流



館で開催された9月の3日間の集会では、60を超える応募から審査によって選ばれた21の研究発表、招聘講師による4つの講演、4組の発表者を含む言語獲得についてのパネルが行われ、統語論・意味論・音韻論等の諸分野に跨って、アルタイ諸語に見られる様々な現象について活発な議論が交わされた。特に今回の集会では、日本語・トルコ語等の個別文法の範囲を超えて、それらの対照に基づいた通言語的観点からの研究も多く見られ、また、個別言語を対

象とする研究発表に於いても、他言語を専門とする参加者から積極的に質問やコメントがなされるなど、集会の趣旨にも相応しく、より包括的な理論研究へと発展しつつある様子を強く窺うことができた。4つの招聘講演では、スタンフォード大学の Beth Levin 教授、イリノイ大学の James Yoon 教授、カリフォルニア大学サンタクルーズ校の伊藤順子教授・Armin Mester 教授夫妻、南山大学の斎藤衛教授と、いずれも当該分野では世界的に知られる一流の講師を得ることができ、これらを聴くために遠方から駆け付けた参加者も少なくなかったと思われる。実際、アルタイ諸語の特徴的な現象を広い視野に立って論じた分析には、会場の聴衆からも大きな反応があり、非常に有意義な講演となった。また、言語獲得をテーマとしたパネルでは、南山大学の村杉恵子教授の企画・司会の下、特に関係節の習得に焦点を当てた4つの発表が行われ、アルタイ諸語の分析から人間の普遍的言語能力の一端の解明へと至る貴重な寄与がなされた。これら高い水準の内容を持つ多くの発表に恵まれたことから、一旦の延期にもかかわらず、参加者は日本内外から110名以上を数え、大きな成功を収めるに至った。会期中、集まった多岐にわたる専門領域・広い世代の研究者の間では、発表に於ける質疑のみならず、休憩時間中のロビーや終了後の食事の席などでも盛んな議論の交換が見られ、極めて実り多い価値ある4日間となった。

文責：前澤大樹(グローバル COE 研究員)



GCOE 第8回 国際研究集会

日本語テキストの歴史的軌跡——解釈・再コンテクスト化・布置

2009年9月3日(金)ー5日(日)
プラハ・カレル大学(チェコ)

9月3日から5日にかけて、美しい百塔の街プラハのカレル大学との共催で、「日本語テキストの歴史的軌跡——解釈・再コンテクスト化・布置」という国際研究集会を催した。15世紀半ばに設立されたカレル大学哲学部と本部、いずれも旧市街の伝統ある建物の教室を会場として、グローバル COE の拠点リーダーである佐藤彰一教授の開会



の辞をはじめ、発表者16人による研究報告と活発な討議は、楽しくもまた充実したものであった。古代から現代までに産出された多様なテキストを素材として、「解釈と布置」を大きな議論の枠組みとしつつ、大学院生たち

をまじえた内外の研究者が、自由な視点から論じた。とはいえ、質疑応答を媒介にしつつ、それらは予想以上に相互に関連したテキスト相互関連の様相を示すものとなった。発表対象となった分野は、日本語の文法と言語学(釘貫亨・深津周太・松澤和宏)、少女マンガと現代小説(Anna KRIVANKOVA・重見晋也)、和歌とその翻訳(Tzvetana KRISTEVA・玉田沙織・Zdenka SVARCOVA)、平安朝の物語と宗教テキストを含む絵画(Martin TIRALA・高橋亨・阿部泰郎・青木慎一)、歴史と思想(古尾谷知浩・David LABUS・池内敏・石井紫郎)と多様である。それらを窮屈な理論の枠にはめることなく、その討議の過程から、自ずから「テキストの解釈と布置」また再解釈による「再コンテクスト化」の問題が浮上したといえよう。この研究集会の名古屋大学側の窓口は高橋亨が担当し、一年以上も前からカレル大学日本学科の人々と相談の上で計画を進めた。当初は、日本語テキスト解釈の研究と教育をふまえて、

異文化コンテクストによる解釈の差異という視点から討議することを考えたのだが、ありきたりの比較文化論の枠を超えるために、「テキスト布置の解釈学的研究と教育」というテーマ設定が有効だったのである。そこでは、研究方法として一般化できる理論の共通性と、日本語の構造や文化、歴史社会的な特性と関わる問題が、「ファジーな二重化」の重要性として見えてきた。この国際研究集会の使用言語も、当初は英語と日本語として計画されたが、海外の会場で日本語のみで行われて成功したことも特筆しておきたい。



カレル大学側の窓口は、当初はヤン・シーコラ教授の担当であったが、やむを得ぬ事情で参加できなくなったため、同じ日本学科のマルチン・ティララ准教授が具体的な計画実現に努力してくださった。日本から2日目をかけつけて参加してくださったシュワルコヴァ教授をはじめ、聴衆として、また会議の運営に協力してくださった大学院生など、カレル大学の関係者に深く感謝したい。国際会議の常ながら、濃縮された新たな出逢いを今後に生かすことも大いに期待される。

コーディネーター：高橋 亨(文学研究科教授)





講義科目の紹介

グローバル COE プログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」では、「テキスト布置解釈学原論」と「テキスト布置解釈学各論 I～VII」および「テキスト布置解釈学概論」を開講し、2008年度博士後期課程入学者から各2単位の修得を義務化しています。ここでは2009年度前期に開講した授業の内容を紹介しています。また、グローバル COE プログラム授業科目の履修は、「グローバル COE 論文賞」および「大学院学生海外派遣制度」に応募する際の条件となっています。

テキスト布置解釈学原論【前期】

加納 修 准教授 (西洋史学)

2009年6月25日(金)・7月2日(金)

Royal Charters, Formulae, and Law-codes in the Merovingian Kingdom

June 25

Medieval charters begin with those of the Merovingians. Royal charters give us a lot of information about the royal government. But the extant documents are only a part of all the royal charters really issued. Karl Ferdinand Werner and Peter Classen stress the wide use of charters in this period, and Walter Goffart insists that “fewer than 0.001 percent of Merovingian charters have survived directly or indirectly”. The study of transmission helps us redefine royal charters, define the corpus, taking lost documents into consideration, and, in doing so, a reevaluation of the relations between royal charters and related documents becomes possible.

The study of transmission shows that royal charters confirming possession or legal transaction have little chance to be copied, i.e., transmitted. But royal charters confirming possession or legal transaction are well represented by formulae, and also, to a lesser extent, by law-codes. Although historians have considered privileges as the most typical kind of royal charters, these confirmative charters would have been representative of Merovingian royal charters. And here is a point of encounter between royal charters, formulae, and law-codes. These confirmative charters

constitute a privileged type of royal charters for the study of the relationship between these sources.

July 2

Recently Alice Rio has discussed relations between charters, formulae, and law-codes in Frankish kingdoms. She argues that, unlike the law-codes, formulae document legal practice from the perspective of demand, not imposition: their scope was defined by what it was that people actually wanted to do with law, rather than by the more abstract understanding of how society should function characteristic of the law-codes. She is fundamentally right. Yet, there are also formulae of documents issued by the legislator. They reflect not only what people actually wanted to do with law, but also the king's, the legislator's view. I think that two perspectives, perspective of demand and that of imposition, or at least the king's view are intermingled in these formulae. In order to discuss this problem, and to examine the relationship between charters, formulae and law-codes, I examined a strange legal custom called “affatomie”. I would just like to insist that the dichotomy between charters or formulae representing practice and law-codes reflecting theory is too simple and misses the point.

釘貫 亨 教授 (日本語学)

2009年7月9日(金)・7月16日(金)

The Phenomenological Genealogy between TOKIEDA Motoki “Language, as a Action Process” and ARISAKA Hideyo “Sound, as an Idea of Pronunciation”

Japanese language study has a couple of main streams. One stream is traditional method since 12th century. And other one is western linguistics. Traditional method had been Teniwoha and Kanazukai. The origine of Teniwoha is Teniha-Taigaisyo, and the one of Kanazukai is Gekansyu by Fujiwaranoteika. Teniwoha and Kanazukai had been the main frame of Japanese classic study. This study was shouldered by the urban literary aristocrat and noble Samurai, urban

military nobility. This study had continued from Kamakura period to the first half of Edo period, 17th century. For the future from second half of Edo period, the academic support of cutting edge shifted to provincial samurai from traditional urban aristocrat and noble Samurais.

In Edo period 18th century Teniwoha changed to he Kakarimusubi (Teniwoha-Himokagami, Kotobano-Tamanowo) by MOTOORI Norinaga, Katsuyo

(conjugation) by SUZUKI Akira (Katugo-danzokuhu) and MOTOORI Haruniwa (Kotobano-yachimata). At the same time Kanazukai changed to the classical phonetics about old Japanese (Waji-syoransyo by Keichu, and Kand Jion-Kanazukai by Motoorinorinaga). The studies of second half of Edo period by provincial samurai was very demonstrated and rational and practical. Modern Japanese language study directly depends on the study of this period which had prepared the modern scientific methods.

In this lecture, I notice the three Japanese scholars, YAMADA Yoshio, TOKIEDA Motoki, ARISAKA Hideyo. They strongly influenced modern Japanese language studies by their characteristic theoretical contribution. They commonly criticized the new theoretical wave of western

linguistics and tried for modernization of the traditional method of language study. They commonly depended upon modern German metaphysics for the definition of factors about language. Yamada referred Kant, Tokieda and Arisaka quoted Husserl. They competed the new theory of western linguistics. Commonly they were conscious of themselves for succeeding to traditional Japanese language studies. Yamada and Tokieda knew of succeeding Teniwoha tradition, Arisaka did of succeeding On-in study in Edo period. They insisted definition about object of observing. Yamada tried to define the sentence as a result of apperception. Tokieda insisted to define the language as a action process. Arisaka tried to define the sound as an idea of pronunciation.

テキスト布置解釈学原論 特別講義

●ドミニク・バルテルミー 招聘教授(パリ第4大学教授)

第1講義 ● 2009年7月6日(月)

The Civil War in Tenth Century France 10世紀フランスとアキテーヌの内乱

パリ第4大学のドミニク・バルテルミー教授による4回にわたる連続講義は、騎士制度に焦点をあてる。紀元千年前後のフランス中世史の権威たる教授は、自家薬籠中のものとした同時代史料の詳細な検討を通じて、近代人が騎士制度やそのエートスに投影したロマンチックなイメージを引き剥がし、それをつうじて封建制の再構築をはかることを目的としている。さらに教授は近年日本の武士についても深い関心を寄せており、日本の武士と西洋の騎士との比較も随所に盛り込んでいる。それは単なる文明論的な比較ではなく、騎士と武士のイメージに共通する構築性という問題点をより明確に浮き彫りにするための作業のようでもある。第1回目は、「10世紀フランスとアキテーヌの内戦」と表題された。とりわけランスのフロドアール『編年誌』、ランスのリシェ『歴史』そして聖人伝のなかに見える事例を中心とした分析であった。バルテルミー教授によれば、この時代は「ポスト・カロリング時代」にして「プレ騎士時代」であり、私戦

をとまなう復讐の時代であった。この時代の騎士 (miles) の行動様式を見る限り、彼らは騎士道によって称揚される二君にまみえずといった道徳的に洗練された存在ではなく、形勢が不利と見るや自身の利益に応じて寝返ることもしばしばあった存在であった。そしてバルテルミー教授はこの時代の騎士を、勇猛さを讃えられる野蛮人ではなく、真の意味での臆病者であったかもしれないと結論する。年代記作家の関心に基づく史料の構築性や傾向性についても注意を払っていた点も印象的であった。来日直後の講義であったため、バルテルミー教授は大変疲れているように見えた。しかしながら30名を超える学生を前に、ただ原稿を読み上げるだけではなく、重要な概念を板書で丁寧に説明しながら講義を進め、質疑応答にも具体例で応じてくれた。そこには長年の教育者としての経験だけではなく、教授自身の人柄が滲み出ているようにも思えた。

(小澤 実)

第2講義 ● 2009年7月7日(火)

The Chivalric Transformation 騎士世界の変容

第1回講義においてバルテルミー教授は、10世紀フランスにおける内乱では、可能なかぎり用心深く振る舞い、敵に手心を加えることが規則であったことを主張した

が、そうした騎士たちの世界が11世紀の間に変化し、若き騎士たちが命をかけて戦い、武勲によって名声を勝ち取るべく振る舞うようになったことを、ノルマンディー

の年代記者たち(オルデリク・ヴィタリスやギヨーム・ド・ポワティエなど)の記述にもとづいて明らかにする。個人的武勇を誇示できない10世紀の社会があったからこそ、11世紀の騎士道の行動様式の発展が生まれたとする説明は、「紀元1000年の変動」説に対する批判の一環をなすばかりでなく、「1100年頃の変動」という学説がバ

ルテルミー教授のなかで熟成されつつあることを示している、たいへん刺激的であった。また、講義の途中で行われたバイユー・タペストリーの諸場面についての説明は、とりわけ学生たちへの教育的配慮に基づくが、戦闘についての具体的なイメージを喚起して、11世紀の騎士たちの世界へとわれわれを誘ってくれた。(加納 修)

第3講義 ● 2009年7月13日(日)

Knights and Devils 騎士と悪魔

バルテルミー教授による第3回目の講義は、フルーリ修道院に伝来する『聖ベネディクトの奇跡』を題材とした、テキスト生成とコンテキストの作用に関する分析であった。9書からなる『奇跡』は一人の執筆者によって完成したものではない。9世紀のアドレバルドによる第1書、アイモによって1005年に執筆された第2書と第3書、1040年ごろアンドルーによる第4書から第7書、ラルフ・トルタリウスによる1100年ごろの第8書、12世紀はじめのユークによる第9書というように、複数のフルーリの修道士によって徐々に完成へと向かうユニークなテキストである。このようなテキスト生成を経ているがゆえに、時代の変化がテキストに反映されていることが予想される。バルテルミー教授はこの例外的に長期にわたる編纂を経験した『奇跡』にみえる「悪魔憑きの治癒」と

いう特定テーマを、同時代のそのほかの奇跡譚と比較することにより、ある特徴を抽出した。つまり、初期の段階から紀元千年前後においては、人間の心的異常は悪魔憑きによって引き起こされ、その状態を脱するためには聖人が悪魔に打ち勝つことが必要であった。しかしながら1100年ごろに執筆されたラルフによる第8書は、心的異常に関してそれ以前とは異なる描写をおこなった。つまり、以前強調されていた心的異常は悪魔の力によって引き起こされるという因果関係が強調されなくなっているというのである。それは悪魔の存在、悪魔と聖人との関係、心的異常者に対する態度が1100年ごろを境に変化したことの表れでもある。バルテルミー教授はこのような変化がおこった1100年前後は転換の時代であったことを主張した。(小澤実)

第4講義 ● 2009年7月21日(火)

The Peace of God: Towards a Reappraisal 「神の平和」の再検討に向けて

神の平和運動とは、司教が聖遺物などの聖なる力を利用して内戦により乱された領域内の秩序を回復する社会制度であるといわれてきた。セミションやホフマンらがつくりあげてきた通説では、そのような社会制度は989年のシャルル教会会議と994年のルピュイ教会会議を嚆矢とし、その流れが中世盛期のフェーデ解決へとつながるとされてきた。その根底には、キリスト教会の平和志向的宗教メンタリティが封建騎士の行動様式を変容させたとする理解があった。しかしながらバルテルミー教授は、従来利用されてきた史料の再検討と北フランスにおける事例の精査により、以上述べた通説を大胆に批判する。司教たちは聖遺物を掲げてキリスト教的心性を内戦の当事者たちから引き出したというよりも、説教を通じて騎士を集め、彼らの武力を背景に領域内に秩序を回復したとする。司教は制裁手段として破門という宗教的武

器をもっている。1070年のルマンの事例に見られるように、11世紀になると北フランスに宣誓によって結ばれる都市がつぎつぎに生まれた。そしてそうした都市は内戦のさいにしばしば領主の攻撃を受けることになる。そのとき都市は自身が属する管区内の司教と協力して内戦の被害から自己防衛する。キリスト教的道徳が色濃く反映された中世の騎士社会を生み出したのは、従来言われていたような神の平和運動ではない。特定教区内で行われた都市民による宣誓に基づく北フランスのコミュン運動こそがその原動力である。(小澤実)



テキスト布置解釈学各論 [前期]

各論 II 文学テキスト

阿部泰郎 ● 宗教の所産としての聖典（キャノン）や尊像（イコン）は、それを宗教という超越的な〈聖なるもの〉をまなざす運動を生成するテキストとして普遍化することにより、その担うところの意味や機能を時代の制約をこえて解釈することが可能となると思われる。いま、その解釈の枠（マトリックス）としての目録というテキストを媒介として、その布置を探ろうとする。古代から中世にかけての諸宗の大寺院において、それらの宗教テキストの場である経蔵は、如何に形成され、また変化を蒙って再構成されていったか。その適時的変容と展開およびかきとなる時点での共時的構成とその配置の状況は、遺された目録によって立体的に把握することが可能である。今次の講義では、第一に日本密教の形成を担った入唐八家の一人、天台宗の円珍が三井寺に遺した各種の請来目録を通覧し、それが最終的に山王院経蔵目録として体系的に構築さ

れる生成過程を追跡した上で、後に祖師像と目録が一体化して祀られる事例を紹介する。第二に、真言密教の国家寺院である東寺において、真言宗の空海が請来した仏舎利と三十帖策子を中心に、後七日御修法などの国家修法と結合した宝蔵のテキスト体系が如何に形成展開したのかを、寛信の写した東寺一切経目録や杲宝による『東宝記』により復原し、更に中世に至り西院御影堂を拠点として構築された内陣経蔵のテキスト体系の寺内法会儀礼と複合した形成過程を跡付ける。第三に中世真言宗の展開を領導した三寶院流の拠である醍醐寺三寶院経蔵について、院政期に元海―実運―勝賢の三代にわたり形成された経蔵目録を分析し、当時の王権の動向と密接に結びついて形成された経蔵の全体像が明らかになりつつある。その考証過程をドキュメントしつつ、テキスト解釈の可能性を探る。



各論 IV 思想・哲学テキスト

森際康友／長尾伸一／クレール・フォヴェルグ ● 受講生から何を学んだかを聴取した。それを踏まえて、長尾、フォヴェルグ、森際が、それぞれの分担部分をまとめるとともに、講義の総括を行った。長尾は、科学と経済認識の相関を問題とした。1980年代以降の科学哲学では、科学の対象の実在性を問題にする実在論が復活した一方で、科学を社会現象としてとらえる科学社会学が発展した。経済学は社会現象を経済として解釈する原語を提供し、それは最近まで支配的な政治言説となっていた。だが経済学は科学化への強い衝動を持つとともに、その背後の社会のニーズによって内容自体が再編されていく点で社会科学である。この事実は、昨年からの経済危機に由来する政策転換が、今後の経済に与える影響にも関わる。各国は、環境対策への財政支出に舵を切りつつあるが、それが定着すれば国家の政策体系の再編につながり、ひいては社会科学全体の再編にもつながっていく。フォヴェルグは、テキスト以前の解釈学、およびテキストにおけるシンボルの扱いを中心にまとめた。ガダマーの解釈とは、体の記憶の中にあるあらゆる概念、「予見概念」を解釈することであった。プラトーン時代の『パイドロス』を例に、口頭の言葉こそテキストよりも価値のあ

るものであり、対話を通じた言葉による思想の伝達こそ、真実に到達する方法だと考えられていたことを示し、フォヴェルグはそれが“discours”であると説明した。また、デイドロの百科全書に関して、それまで細切れだった知識を継続・連続させることで知識の類似性を生み出し、新しい知識が生まれる可能性を提示した。森際は、ガダマーの解釈学のねらい、構造、そして意義と限界をおさらいした。また、法学的世界観の成立と展開を、法学による世界解釈の運動として読み直し、語った。内容は、第10講、11講を参照されたい。最後に、森際が講義全体の総括を行った。テキスト解釈は holistic な営みであり、常に世界解釈へと向かう。解釈学的な態度での世界理解は、近代哲学の主客二元論を克服しうる健全な態度である。そこには理性の傲慢を抑止すると同時に、理性・言論（ロゴス）の可能性を科学・経済・法といった多様な仕方でも真摯に探究する構えが見受けられる。言語的コミュニケーションの原初性、および書かれたテキストの記号としての豊穡についての自覚が、世界の豊かさや奥行きを開発、学の歓喜、理性・言論に対するこの均衡のとれた姿勢を可能にするのであろう。

ゼーン・ゴベル ● この講義では、受講者に国際的な場における英語での研究発表の重要な側面に触れてもらった。受講者は、講義の最初の5週間で、学会発表の要旨の書き方、発表準備のし方、英語での発表の重要な特徴、および聴衆からの質問に回答する上での方策について学んだ。講義の中で提示された具体的な学習目標は以下のものである。口頭発表を行う自信を高めること、パワーポイントを用いた適切な学術的スタイルの発表を準備・構成することができる、聴衆の注意を惹きつけ、それを維持することができる、発表への適切な導入を行うことができる、明瞭で構成に優れた議論を行うことができる、視覚機材を有効に利用することができる、発表を終えるに際し、適切な結論を提示することができる、発表終了時に、適切な疑問

を喚起することができる（つまり発表は、十分に興味深く、聴衆がもっとよく知りたいと思うようなものでなければならない）、聴衆からの質問に答えることができる。第5週以降、全受講者に自らの研究に関するパワーポイントを用いた20分の発表の準備を始めるよう求めた。各者、まず導入から着手し、続いて研究の理論的・方法論的背景、実際のあるいは提案する研究方法、データについての議論、および結論についての節を付け加えた。毎週、準備ができた部分を発表する機会を設けたため、受講者には発表練習の機会を概ね5回与えることができた。そして最後の3週間で、全員にパワーポイントを用いて最終的な発表を行うことを求めた。この最終発表を対象として、受講者に対し100点を満点とする評価を行った。

テキスト布置解釈学概論

本講義は博士後期課程科目の「テキスト布置解釈学」講義（原論・各論）の導入として博士前期課程の受講生を対象として開講され、三人の担当教員によるワークショップ形式でテキストの布置構造と解釈の問題を論じるものである。毎回一つのテーマ（使用言語、作者名、メディア、文体等）を設定し、担当教員がそれぞれの専門の歴史テキスト、思想テキスト、文学テキストについて論点整理を行い、その後受講生とともに全体で質疑応答を行った。

思想テキスト

クレール・フォベルグ 外国人教師

ディドロは『百科全書』編集者かつ批評家としてジャンルの問題を重視し、知識論および史学の観点からそれを検討した。文学・科学・芸術の著作を分析し、それらの歴史を描くことによって各ジャンルについて述べることで、それらのジャンルの詩学を明確にすることが問題であった。ここで言うジャンルとは一つの知識の分野を示すものであり、一つの分野には種差や区別の基準となる特性がある。したがって、『百科全書』は読者が自由に利用できる十七巻に納まる「諸々のジャンルの蔵書」たりうるものである。文体の特性は文学的特性に限らず、科学と芸術と技術によって異なる形で現れる。確かに、『百科全書』全体に共通する文体があり、その文体は『百科全書』を一つのジャンルとして特徴付ける文体だが、百科全書のジャンルから見て、各項目において言葉と文体が変化することが必要となる。作者特有の文体の結果だけでなく、項目が取り扱う科目と問題が適切な文体を必要とするからである。結局、『百科全書』は文体の特性によって客観性を形式化させているのである。

歴史テキスト

加納 修 准教授

「歴史テキスト」を歴史記述に限定することはせずに、西洋中世史研究で用いる様々のジャンルのテキストを取り上げながら、毎回テーマとして設定された問題を考察した。ジャンルに関して言えば、近代的なジャンル区分を用いて考察すると同時に、西洋中世に独自のテキスト認識が存在したことを明らかにする必要を強調した。「文体」についても同じことが言える。近年、西洋中世史研究では写本研究への関心が高まり、あるテキストとそれを取り巻くテキスト群が、比較的短い時間の経過の中ですら変容しえた可能性が強調されている。しかしテキストの受容や伝来への関心が、テキスト成立時の布置構造への関心を失わせることがあってはならない。

文学テキスト

鎌田 隆行 講師

18世紀までは主に遊戯的であった散文によるフィクションが、大革命以後の歴史意識の変化、識字率の高まりやメディアの多様化による潜在的読者層の拡大を背景に、とりわけバルザックの『人間喜劇』のような総合的小説の試みを通じ、超ジャンルの言説として同時代の社会機構を解明する知的射程を担うに至るプロセスをテーマごとに角度を変えて論じた。また文体については、狭義の文体というよりも、パラテキスト（序文、作品の題名、作者名など）を含めた広義の作品のスタイルの現れを考察した。バルザックにおける百科全書的な世界の総体的解明の計画、また現代（同時代）の歴史というコンセプトの発展について、思想・歴史を専門とする他の担当教員と意見交換を行うことができた。また、ゲストスピーカーとして高橋亨教授に日本古典文学テキスト、阿部泰郎教授に文学・宗教テキストのテキスト布置の問題を各一回論じていただき、東西の文学テキストの生成と受容の展開について比較討論する機会を持った。



グローバル COE 講演会

ドミニク・バルテルミー教授

パリ第4大学 中世フランス社会史



第1回

The Beginnings of European Chivalry (XIIth century)

ヨーロッパにおける騎士身分の発端

2009年7月14日(火) 16時—17時30分

バルテルミー教授の2回にわたる講演の目的は、ヨーロッパと日本における騎士（武士）身分の比較にあり、第1回目の講演ではヨーロッパにおける騎士身分の特徴を明確にするとともに、その形成のプロセスについて教授独自の見解を披瀝した。その内容はすでに3回の講義において詳しく紹介されたので、バルテルミー教授は繰り返しを避け、講義で取り上げなかった史料を用いて、いわゆる封建的無秩序の中からではなく、10世紀さらにはそれ以前からの流血を避ける傾向を有していた戦いの中から、敵に敬意を払いながらも個人的武勇を目指す騎士の社会が生まれてきたとする「1100年頃の変動」という自説を補強した。講

演後の質疑応答では、なぜフランスで騎士身分が発展したのか、カロリング期に騎士身分の成立を唱えるバルテルミー教授がなぜ12世紀における騎士身分の成立を語るのか、カロリング期には敵を殺害する記述が多いのに、なぜ10世紀以降には敵を容赦する記述が増えるのか、などの問いが投げかけられた。質疑応答によって、ヨーロッパにおける騎士身分成立の具体的なコンテキストがいつそう明瞭にされたことを、参加者の一人として喜びたい。講演後は、同オフィスにおいて懇親会が開かれ、西洋中世史を専攻する学部生や院生、他分野の研究者らと交流が持たれた。

第2回

Noble Warriors of Japan and France in the XIIth and XIIIth centuries

12、13世紀日本とフランスの高貴なる戦士

2009年7月22日(火) 18時—19時30分

ヨーロッパ中世の騎士と日本中世の武士の類似性は古くから指摘されてきたが、かつての研究はジュオン・デ・ロングレのそれを含めて、類似性を強調する傾向が強かっただけでなく、また「封建制」システム概念を用いて比較を行ってきた。これに対してバルテルミー教授は、根本的な相違の存在を認めた上で、英雄的な理想や社会的な機能において、日本とフランスの騎士（武士）に共通する部分が見られるとする。『ローランの歌』のような武勲詩におけるのと同じく、『平家物語』にも高貴な戦士の地位を安定させ、戦士集団内部の位階秩序を維持するのに役立つような作法が確認できるだけでなく、フランス中世における

ように、高貴な敵を尊重する態度が存在し、敵対者同士の間で社会的な関係が重視されていたことを強調する。比較の枠から「封建制」という概念を取り払い、とりわけ社会的な関係に焦点を定めることによって、比較史研究の新たな可能性が開かれたと言えよう。バルテルミー教授は講演の最後に騎士と武士の相違を歴史的に説明するための手がかりをいくつか指摘した。質疑応答ではとりわけ日本中世の武士身分の独自性が参加者から指摘され、バルテルミー教授とのあいだで、騎士と武士の相違について活発な議論が交わされた。

加納 修 准教授 (西洋史学)



オープン・レクチャー

研究成果を社会に広く還元することを目的として、名古屋大学文学研究科グローバル COE プログラムでは21世紀 COE プログラムに引き続き「オープン・レクチャー」と題する公開講座を開催しています。毎月1回水曜日の18時から、グローバル COE が名古屋国際センタービルの15階に開設しているグローバル COE オフィスで、「テキスト布置解釈学」に関連するテーマでの講演を、事業推進担当の先生やその他の先生がレクチャーします。参加は自由です。毎回の題目などはWeb サイトでお知らせしています。本号では2009年10月に開催した分の要旨を紹介します。

第21回

もう一つのテキスト布置構造——ポール・リクールの場合——

2009年10月21日(火) 18時—19時

重見晋也 准教授 (名古屋大学大学院文学研究科・フランス文学 電子テキスト学)

ポール・リクールが『時間と物語』の中で展開した「ミメシス」過程は、物語における出来事の組み立てとしてのミュトスの創造を担うミメシス II を中心に、前過程としてのミメシス I と後続過程としてのミメシス III

に分節される。

ミメシス I は物語作者がテキスト化を達成する以前において世界における行動を概念的、象徴的、時間的という3つのレベルで先行理解する過程であって、その役割は「先

形象化 prefiguration」と呼ばれる。先形象化の結果に基づきテキストはミメシス II において物語の「統合形象化 configuration」を果たすが、それは出来事の継起に意味を与えたり、範列的な構成要素を連辞的な全体に統合したり、年代順の時間を非年代順の時間に変換するといった、媒介機能によって特徴づけられている。

統合形象化の媒介機能は、読者による読書行為を通じて、物語を読者へと媒介する機能も果たすが、それはミメシス III という過程として指図される。ミメシス III は読書行為を通じて物語の「再形象化 refiguration」を果たすが、その内実は、カント的構想力による物語理解によってと同時に読書行為を通じた沈澱作用と革新作用による伝統あるいはパラダイムの形成とパラダイムに依拠した「読者の期待の地平」によって特徴づけられている。

こうしたミメシス過程は解釈学的循環によっても特徴づけられている。それは「理解」、「説明」、「適用」とい

う三つ組構造に規制されつつ、特に文学的解釈においては、読者の期待の地平を伴う素朴な第一次理解から出発して、満たされていない意味への期待によって突き動かされる第二の読解を経由し、最終的には歴史的文献学的方法を用いる「歴史的」な第三の読解へと至る、構造化された循環である。

以上のように、リクールにおける configuration は、筋立ての生成から受容までのプロセスの力動性を強調するモデルとして理解することができるが、リクールの同書における関心がミメシス過程の解明にあるわけではないため、ミメシス I から III までの各段階で仮定されている各レベル同士が厳密に対応させられないまま、configuration の媒介機能によって変換されるとされるなど、整合性に欠ける部分もある。本グローバル COE プログラムの研究全体が、リクールのモデルの乗り越えに果たす役割も大きいのではないかと考えている。

グローバル COE 研究員 ブリーフィング ⑥

グローバル COE ポスト・ドクトラルの研究員は、個別の専門領域で扱っている研究対象をテキスト布置解釈学の枠組みで捉え直すべく、名古屋国際センターのグローバル COE オフィスを中心に研究活動を行っています。研究員たちの研究成果は「研究員ブリーフィング」と呼ばれる事業推進担当者と研究員が集う場で議論され、研究論文へと結実していきます。

金 銀珠 ● 中古語の主格助詞「の」と述語の名詞性

本発表では、「空のうち曇りて、風冷やかなるに」（源氏物語・夕顔）のような中古語の接続節において「の」形式が主語を表す場合の節内における述語の形態、意味、統語的特徴について考察した。従来の研究においては「の」形式が接続節において主語を表すこのような例の存在が言及されながら、このような例を正面から分析した論は見当たらない。これは「の」形式が主語を表すのは述語が連体形を取る場合が中心であったからに他ならない。連体形述語を取らない周辺部の例から考察することで、連体形述語の前で主語を表す

「の」形式の統語機能にも迫ることができるのではないかと考えた。また、中古語の助詞「の」に関してはそもそも助詞「の」が「神の手」「ものの音」のように属格形式として用いられながら、同時に主語を表す助詞として用いられたのはなぜか、という根本的な問題がある。この問題に対し、「の」接続節に見られる述語の形態・意味・統語的な特徴は形式「の」が名詞を修飾するのと同じように、述語の名詞のような性質に係ろうとするために生じる現象ではないかという見通しを示した。

前澤大樹 ● 不連続 AP 構文と tough 構文

本発表では、前回扱った不連続 AP 構文の分析をより多くのクラスの形容詞へと拡張することを試みた。(1) に示すような、ここで不連続 AP 構文 (discontinuous AP constructions, DAPC) と呼ぶ構文は、理論的な検討や分布の観察に基づけば、補部を伴う形容詞による後位修飾構文 (2b) に平行的な基底構造を持ち、(3) で主要部名詞の移動が適用されない場合に (2a) の DAPC が得られると結論できる。この分析の下では、DAPC が可能なのは主要部名詞が形容詞よりも低い位置に生成される場合のみということになる。ここで、(4) のような DAPC が可能なことに着目すると、tough 構文に対する (5) の2つの分析のうち、(a) が正しいことが示唆される。tough 構文で観察される再構築効果は、これを支持するよう

に思われ、(4) に対して (6) の構造を与えることができる。一方で tough 構文の量化主語が再構築できないことは、対応する DAPC で限定詞として不定冠詞のみ許されるという制約に構造的な説明を与える。このように、tough 構文の構造に対しても、異なる観点からの知見を得ることができた。

- (1) a similar car to mine
- (2) a. a sure candidate to win b. a candidate sure to win
- (3) a [_{AP} candidate_i a [_{AP} sure [_{TP} t_i to win]]]
- (4) a difficult passage to play
- (5) a. John_i is easy [_{CP} t_i C [_{TP} PRO to please t_i]]
b. John_i is easy [_{CP} Op_i C [_{TP} PRO to please t_i]]
- (6) a [_{AP} a [_{AP} difficult [_{CP} passage_i C [_{TP} PRO to play t_i]]]

韓国での予備調査 8.30—9.1

池内 敏

江戸時代に日朝外交の実務を担った対馬藩の藩政文書は、現在、東京・福岡・長崎の各都府県と大韓民国の各地に伝来します。これらのうち国立国会図書館には、釜山・倭館に置かれた東向寺僧が日朝外交文書を整理・記録した『両国往復書牘』なる膨大な史料群があります。ここに収録された文書と同一のものが、対馬府中で以訂庵僧によって整理・記録された『本邦朝鮮往復書』なる史料群で、東大史料編纂所と韓国国史編纂委員会に伝来します。ここで「同一の」と書きはしましたが、実は、『両国往復書牘』『本邦朝鮮往復書』それぞれに筆録された外交文書が一致するか否かは、誰も検討したことがありません。両史料群は筆録機関や担当者が異なり、とくに担当者の在任期間にズシがあるにもかかわらず、丁寧に摺り合わせた作業はまだ存在しないのです。したがって、そうした基礎作業が早急に求められているとも言えます。一方、『両国往復書牘』『本邦朝鮮往復書』に収録されているのは、実際に両

国を往来した外交文書であり、それは前近代東アジアの公用語＝漢文で書かれた文書です。いま私の関心は、そうした外交文書が出来上がる過程についての分析にあります。韓国国史編纂委員会には、『和文控』なる史料群があり、これは漢文になる前の和文での外交文書草案を収録したものです。和文草案がどのような過程を経て漢文草案となり正式な外交文書になるのか、その間にどのような人々の間でどのような議論がなされて仕上げられてゆくのか。また、そこに先述の東向寺僧・以訂庵僧がいかに関わっていたか、そうしたことを含めて解明したいと考えています。そのために『和文控』だけでなく、その周辺史料を含めて関連する史料群を探し出しているところであり、今回の活動は、プラハでの国際研究集会へ移動する前のわずかな時間を活用して、予備調査を試みたものです。（推進担当者・日本史学）

パリ東大学での GCOE 国際研究集会報告書集刊行の打ち合わせ

松澤和宏

パリ東大学での GCOE 国際研究集会（2009年3月）報告書刊行の打ち合わせ、および博士課程後期課程の大学院生の学術交流に関する協定、グローバル COE プログラム拠点における実施細則に関する打ち合わせを、パリ東大

学にて8月28日、9月1日に行った。（研究担当サプリダー・フランス文学）

プロヴァンス大学からの招聘教員との打合せ

重見晋也

プラハでの国際研究集会終了後、パリのアーセナル図書館で本年度と次年度にグローバル COE プログラムが招聘する2人のプロヴァンス大学の教員、Vincent Vivès 准教授と Jean-Christophe Cavallin 教授に会い、招聘と国際研究集会に関する打合せを行った。Vivès 准教授は、19世紀フランス詩が専門で、現在は詩学と哲学をテーマにニーチェの草稿研究を行っている。グローバル COE プログラムでは、Vivès 准教授を2009年11月16日(月)から1週間の予定で招聘し、2回の講演会を開催する予定になっている。Cavallin 教授は19世紀フランス小説、特にシャトーブリアン研究を専門としており、これまでもアメリカ・イタリアなどで講演をするなど、国際的に活躍してい

る。今回の打合せで Cavallin 教授を次年度招聘し、グローバル COE 講演会等で講演をお願いすることとなった。既に報告されているように、グローバル COE が中心となって、本学文学部・文学研究科とプロヴァンス大学との間に学術交流協定が締結されている。今回の打合せでは、協定締結を記念する国際研究集会の開催についても話し合い、今後プロヴァンス大学博士課程学校言語・文芸・芸術部門主任の Jean-Raymond Fanlo 教授とも緊密に連絡を取り合っており、次年度以降の開催実現を確認した。（技術統括責任者・電子テキスト学）

International Pragmatics Association 学会参加と James Cook 大学での研究会議参加

ゼーン・ゴーベル

まず最初に、メルボルンで行われた国際語用論協会 (IPrA) 第11回大会に参加し、またジェームズ・クック大学 (オーストラリア、タウンズヴィル) を訪問する上でご助力下さった、グローバル COE プログラム、文学部、学部事務の皆様にお礼申し上げます。IPrA では、「インドネシア都市部の移行の状況における社会的行動、スモールストーリー、アイデンティティ」と題する発表を行った。この発表は、私が大阪大学の研究者と共同企画したパネル「通文化的 / 多文化的状況における記号論、アイデンティティ、ナラティブ」の一部として行われた。パネルは大会初日の午後に行われ、会話的ナラティブ分野の著名な研究者である Michael Bamberg 教授など、25名程度の出席者に恵まれた。また、大会では多くの以前から面識のある研究者たちに再会するとともに、欧州、アメリカ、カナダの諸研究者と新たに知己を得ることができた。例えば、カナダ、サイモン・フレーザー大学の Cecile Vigouroux 准教授とは、イギリス、サウスハウプトンで2010年に開催される社会言語学シンポジウムでのパネルの編成について話し合った。移住者、多言語使用、言語移行についての学術誌特別号の編集についても話し合ったが、この件ではシカゴ大学の Salikoko Mufwene 教授からもコメントがあるだろう。また、会期中、Robert Englebretson 教授 (アメリカ、ライス大学) と Michael

Ewing 教授 (オーストラリア、メルボルン大学) に、インドネシアにおける会話的ナラティブについての学術誌特別号への寄稿をお願いすることができた。この特別号は、Novi Djenaar 教授 (シドニー大学) と私が現在準備しているものである。IPrA の間には、バルセロナ自治大学の Melissa Moyer 教授から、イギリスに本拠を持つ出版社である Multilingual Matters に私のインドネシアの官庁における研究についての本の企画を提出するよう、促された。タウンズヴィルでは、再度 Peter Burns 名誉教授から、インドネシアにおける民族性について、そして、インドネシアにおける若者と言語の歴史的結びつき、またそれが後期オランダ植民地時代の終焉以来の特定の政治情勢とどのように関係しているかに関する可能な研究計画について助言を得ることができた。またジェームズ・クック大学では、Rosiat Henry 准教授と新設のケアンズ研究所によって行われる言語研究に関して話し合った。この研究所は、熱帯地方の民族と人々に焦点を絞った研究センターである。Henry 准教授には、昨年私が氏の学科の客員研究員であった際の研究業績の詳細を、Journal of Sociolinguistics 誌に掲載予定の論文を含め、渡すこともできた。（推進担当者・言語学）

新メンバーの紹介

◆ GCOE 研究員

2008年度末に2名のグローバル COE 研究員がアカデミック・ポストを得て離職したことは GCOE NEWSLETTER no.5 でご案内したとおりです。後任として本年度9月1日より新たに研究員1名が加わりました。

● 内田 智秀

モーリス・メーテルランク (1862-1949) の戯曲の自筆草稿群をコーパスとし、その生成過程の検証を行い、最終稿では得られない新たな解釈、意味づけをこれまで導き出してきたが、本プログラムではその生成を支えてきた19世紀末のベルギーの歴史的、社会的、文化的コンテキストを視野に入れ、さらに深いテキスト解釈をめざしたい。19世紀末ベルギーは独立から半世紀経ったにもかかわらず、その地理的、言語的問題を抱え込みながらも、独自の文化を生み出そうと試み続けていた。こうしたコンテキストに自筆草稿を位置づけることで、最終稿では解明できないメーテルランクの文学に対する態度を見出すことが可能だと考える。しかしメーテルランクがベルギー文学のため作品制作に取り組んでいたと結論づけるのではない。メーテルランクが自らの創造力に問いかけながら、加筆と削除——作家の視点の変化や過去の構想に対する全体的、部分的反省——を繰り返していくことで、戯曲が当初の構想とは異なる全く新しい作品として文学へと変貌を遂げたその過程を、初期代表作『ヘレアスとメリザンド』の草稿の分析を通して解明する。

Uchida Tomohide



台湾・清華大学での講演と学術交流協定の打合せ

11月3日から5日まで、台湾・清華大学からの招待で、昨年12月からほぼ1年ぶりに同大学を訪問し、講演を行うとともに、最終段階に入っている学術交流協定について打合せを行ってきました。

講演は11月3日より、「Concept of Textual Configuration and its Protests」と題して行いました。開催通知の公示から1週間程度の短い周知期間でありなおかつ授業時間中の講演会ではありましたが、張維安清華大学人文社会学院院长をはじめとして教員・学生15名程度の参加を得ました。講演は、題目にあるとおり、テキスト布置の考え方を中心にしてグローバルCOEにおける研究を紹介する内容でした。参加した教員および学生からは活発な質問があり、質疑応答だけで1時間を超えるものとなりました。特に、社会学を専門となさっている張院長からは、マックス・ウェーバーにおけるテキスト布置的概念について興味深い示唆があり、台湾文学を専門とする若手研究者からは、文化的ファクターをどのように取り入れるのかなど、踏み込んだ質問が寄せられました。一方で学生からは、グローバルCOEプログラムの教育事業に関連して、授業の内容や指導方法など、実践的な観点からの質問が寄せられました。



学術交流協定については、張院長に加え前人文社会学院院长で台湾の最高学術機関である中央研究院のメンバーで訪問時に行われていた学長選挙の候補者でもある黄一農教授とも懇談し、学術交流協定の締結と今後の活発な学術交流について話し合い、早期実現を目指すことで意見の一致をみました。両大学の交流を促進するために、清華大学から研究者を招聘し、グローバルCOEで講演会を催したいと申し出たところ、張院長からは黄教授をご推薦いただきましたので、11月中旬に正式な招聘要請を出す予定にしています。(重見晋也)

グローバルCOE 研究員の就職のお知らせ

グローバルCOE 研究員として活動していた品川大輔さん(言語学)が2009年9月30日をもって退職し、同年10月1日付で香川大学経済学部地域社会システム学科に専任講師として着任しました。

後期授業科目について

後期のグローバルCOE「テキスト布置解釈学」開講科目は下記の通りです。グローバルCOEのWebページにも掲載しています。

www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education02/

各論Ⅰ(水3限:128講義室)佐藤彰一特任教授

各論Ⅲ(木3限:129講義室)釘貫亨教授

各論Ⅴ(火5限:127講義室)重見晋也准教授

各論Ⅵ(金4限:総合308/309)ゴーベル・ゼーン准教授

原論(集中)松澤和宏教授(2010年1月7日・8日・9日[2~5限]、1月10日[2~4限]129講義室)

大学院説明会 報告

7月8日(水)14時~15時、127講義室にて2009年度第2回グローバルCOE大学院説明会が行われ、拠点リーダーの佐藤教授から事業全体の進行状況について、また技術責任統括者の重見准教授から大学院生に対する支援事業の予定について説明が行われ、2009年度第1回グローバルCOE論文賞(受付期間:8月28日~9月7日)と第2回大学院生海外派遣事業(同9月28日~10月5日)等について告知が行われました。これらの事業の詳細についてはグローバルCOEのWebページに掲載してまいります。

グローバルCOE論文賞審査結果 ● 2009年度第1回

今回は該当者なしと決まりました。第2回グローバルCOE論文賞の応募期間は来年2月頃の予定です。

大学院生海外派遣事業審査結果 ● 2009年度第2回

今回は該当者なしと決まりました。今年度の海外派遣の募集は終了します。次年度第1回目の募集については、2010年3月頃にWebおよびメーリングリストで発表すると同時に学内に掲示も行う予定になっています。

表紙解説

「明治改正 中村氏 大日本輿地全図」

(名古屋大学文学部日本史学研究室所蔵)

題箋は、虫損が甚だしいが「大日本細見全図」と見える。発行者・発行年の記載が無いが、地図の下段に3府60県一覧表が付けられており、3府60県であったのは1873~75年に限定されることから、その時期に作成された地図とみてよい。

表紙画像のうち拡大図で、隠岐諸島の上部に手前から順に松シマと竹シマが記載される。竹シマには「見高麗又望雲州隠州、一云磯竹島」と付記される。これは必ずしも正確な引用ではないが『隠州視聽合記』(1667年)の記述を踏まえているから、本図における竹シマは鬱陵島のことを指している。本図の松シマは、竹シマ=鬱陵島や隠岐諸島との位置関係や今日の竹島/独島が江戸時代には松シマと呼ばれていた史実とあわせても、今日の竹島/独島を指しているを見たいところである。しかしながら、描かれた島の大きさと形は、明らかに鬱陵島である。

したがって、本図にいう竹シマは欧米の測量ミスによって書き込まれた実在しない島で、松シマが江戸時代に竹島と呼ばれた鬱陵島である。本図は、竹島・松島なる島名と地図上の位置関係に混乱が見られた時期を特徴的に示す地図である。なお、本図の竹シマ・松シマには隠岐諸島と同じ色が施されており、それは朝鮮半島とは異なる色であるが、こうした彩色の様子と領有意識とを直接的に結びつけて理解する態度は、あまりに短絡的である。

(文責:池内 敏/日本史学)